資　料

看護師のユニフォーム変更による幼児期の子どもの反応

大　森　裕　子・松　田　利　恵

Reaction of Infants to Change of Nurse's Uniform

OHMORI Hiroko and MATSUDA Rie

Abstract： As attention towards curing environments for children have increased, one supposed concern of pediatric nurses is to avoid causing fear and anxiety. The author considered nurse's uniform to be one of the physical condition related to child patients, and changed the color and design of uniforms to ones favorable to children to check the infants' reactions. We requested to change the color and design of pediatric nurses' uniforms and asked these nurses to fill out the check sheet regarding children's reaction at the times of greeting, body temperature check, during medical treatment and cleaning care, and to regard uniform usage as a tool. The results showed the many reported the children "smiling" and "pointing their fingers" during greetings. Additionally, nurses used their uniform as a communication tool at greeting and while taking temperatures, and as a destruction tool during medical treatment and cleaning care times.

Key Words： Pediatric nursing, uniform, care environment

抄録：子どもの療養環境への関心が高まりつつあり，子どもにとって恐怖や不安を与えない配慮は小児看護の役割とされる。本研究は，看護師のユニフォームを子どもにとっての物理的環境と考え，子どもの親しみやすい色や柄のユニフォームに変更し，幼児期の子どもの反応を調査した。小児を対象とする看護師のユニフォームを変更し，挨拶時・検温時・処置時・清潔ケア時の子どもの反応とツールとしての利用についてチェックシートに記載してもらった。その結果，挨拶時には「笑顔になった」，「指差しをした」といった反応が多くみられた。また，看護師がユニフォームを挨拶時や検温時にはコミュニケーションツールとして，検温時，処置時や清潔ケア時にはディストラクションツールとして工夫し利用していた。

キーワード：小児看護，ユニフォーム，療養環境

Ⅰ．はじめに

健康障害をもつ子どもが療養生活を営む上で，看護者には子どもが安全かつ安心して安楽に過ごすことができる環境づくりが求められる[1]。近年，小児入院医療管理料の算定がなされ，子どもの療養環境への関心が高まってきている。さらに，プレパレーションへの関心が高まり，アメニティの工夫の重要性も浸透しつつある。

病院は子どもにとっては見知らぬ環境であり，恐怖や不安を感じる場でもある。小児看護の役割として環境づくりは重要であり，子どもに威圧感や恐怖心を与えない配慮の必要性が求められている。恐怖が軽減するよう，病室・廊下・浴室の壁の装飾をしたり，キャラクターがついた血圧計・聴診器・体温計を使用したりするなどの工夫をするとよいと言われている[2]。そして，物理的環境を考えるに当たっては，設備や子どもの安全，安楽に加え，「スタッフの服装」についても物理的環境の一つとして述べられている[3]。

しかし，蝦名らの報告では，子どもの安心しそうな雰囲気を出すための工夫は，病室・処置室において認

識は高いが実施している割合は低いとしている。また，看護師のユニフォームについては，白以外のユニフォームを着用している割合は25％程度であり，色や柄のエプロンやカーディガンを自由にすることにおいても実施率は低かったと報告している[4)]。

研究者らが臨床実習指導で子どもの親しみやすい色や柄のユニフォームを着用し，子どもと接する機会があるが，ぐずって母親から離れようとしない幼児が，ユニフォームを凝視し，緊張がやわらいだり，初対面の幼児から「私もOO柄のパジャマ持ってるわ」と話しかけられたりした。また，スタッフからも「明るくていいですね」，「子どもが喜びそう」という声が多く聞かれる。子どもや家族と身近に関わる看護師が子どもの好みにあった親しみのある色や柄などを使用したユニフォームを着用することで，看護師とのコミュニケーションがよりスムーズになると考えられる。

さらに，プレパレーションの中のディストラクションは，「痛みを修飾する要素である不安や緊張の非薬物学的緩和法」として知覚統合が未熟である幼児にとっては，最も効果的なペインコントロール方法とされている[5)]。また幼児期には五感を通じた感覚的な刺激を用いることが効果的であるとされており，ユニフォームが視覚的なディストラクションツールとして利用できるのではないかと考えた。子どもの親しみやすい色や柄のユニフォームが病院における子どもの恐怖や不安をやわらげ，治療やケアがスムーズに受けられることに繋がると考えられる。

しかし現状では，施設の規制や看護師自身が子どもの環境としてユニフォームを考えることが少ないことから，変更が容易ではないことが多い。国内の小児専門病院や小児病棟においては，スタッフのユニフォームを従来の白衣から変更している施設も散見されるようになったが，ユニフォームの変更による子どもの反応の変化について明らかにしている先行研究は見当たらなかった。

そこで本研究では，小児に関わる看護師が子どもの親しみやすい色や柄のユニフォームを試用し，子どもとの関わり場面において子どもがどのような反応をするのかを調査し，ユニフォームが療養環境のひとつとしてどのような影響を及ぼすかを検討する。

Ⅱ．目　　的

小児に関わる看護師のユニフォームを子どもの親しみやすい色や柄を使用したものに変更し，子どもがどのような反応をするのかを調査し，今後の子どもにとって望ましい物理的環境を整える上での基礎資料とする。

Ⅲ．研 究 方 法

1. 調査対象

A病院の小児病棟2部署とB病院の混合病棟で小児を対象として勤務する看護師。その中で，研究への承諾を得られた者，各部署につき10名，合計30名を対象とした。

2. 調査期間

2011年5月～2011年7月（約3ヶ月間）

3. 方法

（1）着用方法

小児に関わる看護師が，子どもの親しみやすい色や柄を使用したユニフォーム（図1）を着用して通常の勤務を行なう。柄は10種類あるが，個人と柄の特定はせず自由に着用してもらった。

（2）チェックリスト（表1）

勤務時間に看護ケアで関わった子どもすべてを対象とする。チェックリストは関わり場面ごと（挨拶時・検温時・処置時・清潔ケア時・その他）に子どもの反応（14項目・複数回答可）をその場で記入する。看護師が意図的にユニフォームをコミュニケーションツールやディストラクションツールとして利用したときには，具体的な場面も記載しておく。

記入したチェックリストは，指定のボックスに入れ

図1　ユニフォーム（HP[6)]より転用）

表 1　チェックリスト

<table>
<tr><td rowspan="2">着用月日
児の性別
勤務帯
児の年齢</td><td colspan="2">関わりの場面
1. 挨拶時　2. 検温時　3. 処置時　4. 清潔ケア時　5. その他</td></tr>
<tr><td>子どもの反応
1. 注視した　2. 追視した　3. 指差しをした
4. 笑顔になった　5. 動きが止まった
6. 泣き止んだ　7. 嫌がった　8. こわがった
9. 泣き出した　10. 柄や色を言った
11. 触った　12. 目をそらした　13. 反応なし
14. その他</td><td>ツールとしての利用方法
1. 子どもとのコミュニケーション
2. 家族とのコミュニケーション
3. 他職種とのコミュニケーション
4. 処置やケア時のディストラクション
5. その他
具体的な場面
（自由記載）</td></tr>
</table>

てもらい，後日研究者が回収を行なう。

4. 倫理的配慮

（1）人間の尊厳および人権の擁護

守秘性を保障するために質問票はすべて無記名回答とする。結果は統計的に処理するため，個人や施設は特定されないこと，結果は学会等で公表することを研究協力依頼書に明記する。記入されたチェックリストは，看護師の控え室に設置した指定のボックスに入れてもらい，研究者が回収する。指定のボックスは研究者以外が開閉できないものとする。

（2）相手の理解を求める同意を得る方法

研究目的・方法・倫理的配慮を明記した「研究協力のお願い・同意書」を用いて，研究者が直接口頭で説明した。希望があれば，研究結果を研究終了時に渡すことを説明し，研究への疑問や質問があればいつでも研究者に連絡できることを伝えた。

（3）個人が受けるおそれのある心身上の危険性および不利益の排除方法

研究協力者の勤務する施設の責任者（看護部長）に，研究目的・方法・倫理的配慮を明記した「研究協力のお願い」を用いて，研究者が説明を行ない，理解を得た。研究で試用するユニフォームは研究者が準備し，研究協力者の経済的負担をなくす。研究への協力を拒否・中断しても，勤務施設や業務には一切関係なく，不利益を受けることはないことを説明した。

（4）自己決定の権利の保障

研究への協力は自由意志を尊重し，拒否が可能なことを「調査協力のお願い」に明記した。

本研究は，本学の研究倫理委員会の審査を受け，承認を得た上で実施した。

Ⅳ. 結　　果

1. チェックリストの回収結果

チェックリストは 261 件の回収があった。回収されたチェックリストの子どもの年齢では，乳児 34 名，幼児 191 名，学童 36 名であった。回収数に差があるため，今回は幼児に焦点を当てた結果のみをまとめた。

チェックリストの記入は，関わった場面や印象に残った場面に限定されており，場面ごとの回答結果には差が見られた。以下に場面ごとに，子どもの反応をまとめた。

2. 子どもの反応（図 2）

（1）挨拶時

チェックリストの結果は 161 場面であった。

「反応なし」が最も多かった。反応があったことでは，「笑顔になった」が最も多く 36 件であった。

次いで「指差しをした」が 26 件，「注視した」が 16 件，「追視した」が 14 件，「柄や色を言った」が 15 件であった。

年齢での特徴は，1 歳では「指差しをした」が最も多く見られ，1 歳，2 歳では「注視した」，「追視した」が多く，5 歳では「柄や色を言った」が多くあった。

具体的な場面の記述では，1 歳児「『アッ，アッ』と指さし，笑顔でコミュニケーションがとれた」，2 歳児「『これだれ？』と近寄ってきた」，4 歳児「『僕の担当ミッキーの先生だよ』と母親に話す」，5 歳児「『メロンぱくっ』と児から話す。楽しそう」などがあった。

（2）検温時

チェックリストの結果は 134 場面であった。

「反応なし」が最も多かった。反応があったことでは，「指差しをした」が 18 件，「注視した」が 15 件で

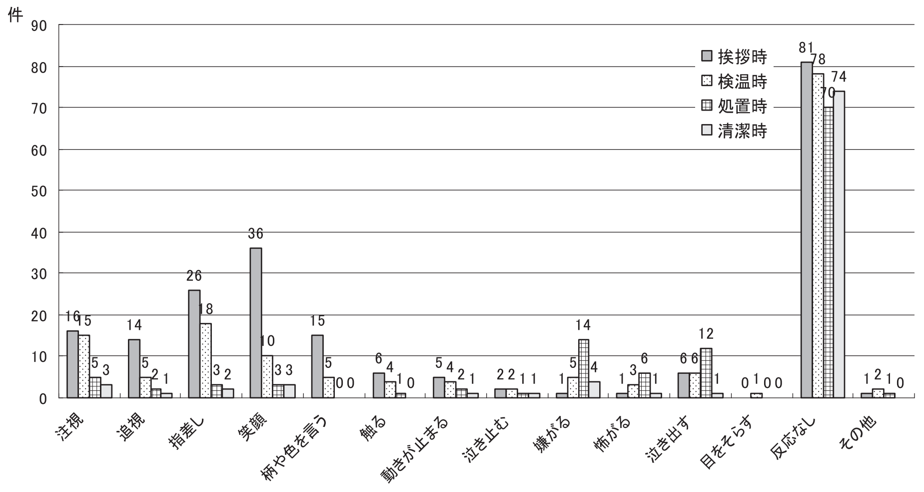

図 2　子どもの反応（複数回答）

比較的多かった。しかし,「嫌がる」,「怖がる」,「泣き出す」といった反応が挨拶時に比べて多かった。2 歳では「注視した」が全反応の 30% を占めた。

具体的な場面では，2 歳児「嫌がっていた児に母が『わープーさんやで』とユニフォームを指すと注視し，嫌がらず検温することが出来た」，5 歳児「『動物さんや』『おさるとらいおんがおる』と声をかけてくれた」があった。

(3) 処置時

チェックリストの結果は 101 場面であった。

処置の種類は，2 病棟が外科病棟であったため，創部のガーゼ交換や点滴のシーネ交換が多くあった。

「反応なし」が最も多かった。またここでは，他の場面では少ない「嫌がる」が 14 件,「泣き出す」が 12 件,「怖がる」が 6 件と比較的多く見られた。これらは具体的な場面でも多く記載されていたが,「処置室に入ることすら嫌がり泣き出した」,「泣き出したらユニフォームは見てもいない」など処置自体の反応が見られた。

(4) 清潔ケア時

チェックリストの結果は 85 場面であった。

チェックリストの結果が最も少なく,「反応なし」の割合が最も高かった。

(5) その他の場面

遊びを提供した場面では，1 歳児「キャラクターを指さして遊ぶ。ピッ，ピッと押してる感じ」とあった。また病棟以外では「X 線検査，待合室でユニフォームを指さし『あーあー』と言っていた」などがあった。また，4 歳児「母が帰宅後泣いているところに行くと，ユニフォームを見て『ミッキー』。その後話していると『ミニーもいる』と笑顔になる」があった。

2. ツールとしての利用

ユニフォームをツールとして看護師が意図的に利用していた場面は，全体で「子どもとのコミュニケーション」が 136 場面,「家族とのコミュニケーション」が 53 場面,「他職種とのコミュニケーション」が 0 場面,「処置やケア時のディストラクション」が 77 場面であった。また，場面数が少なかったために年齢別の比較は難しかった。

場面ごとにみると，挨拶時，検温時は「子どもとのコミュニケーション」のツールとして用いることが多かった。検温時，処置時，清潔ケア時には「処置やケア時のディストラクション」のツールとして多く用いていた。

具体的な場面では，挨拶時，5 歳児にコミュニケーションツールとして利用し,「ポケットに音のなるおもちゃを入れて，上からミッキー柄を押してもらう。『おもしろい』と笑う」とあった。また，検温時，2 歳児にディストラクションツールとして利用し,「『見て見て』と注視させ,『数えて。何匹いる？』と声をかけると泣き止みじっと聴診させてくれた」,「『ブーブー，ミニーちゃん』と母親と柄を確認している間に検温が終了した」とあった。しかし，特に処置時には看護師がツールとして利用しているが効果的に働かない場面も多かった。処置時（ガーゼ交換)，5 歳児「口蓋裂テープ交換，強く嫌がりユニフォームやおもちゃでディストラクションを試みるが結局嫌がり抑えることに」，検温時，1 歳児「検温を始めると泣き始める。話しかけても泣くばかり」などがあった。

さらに処置時には，処置後の遊びに用いることもあ

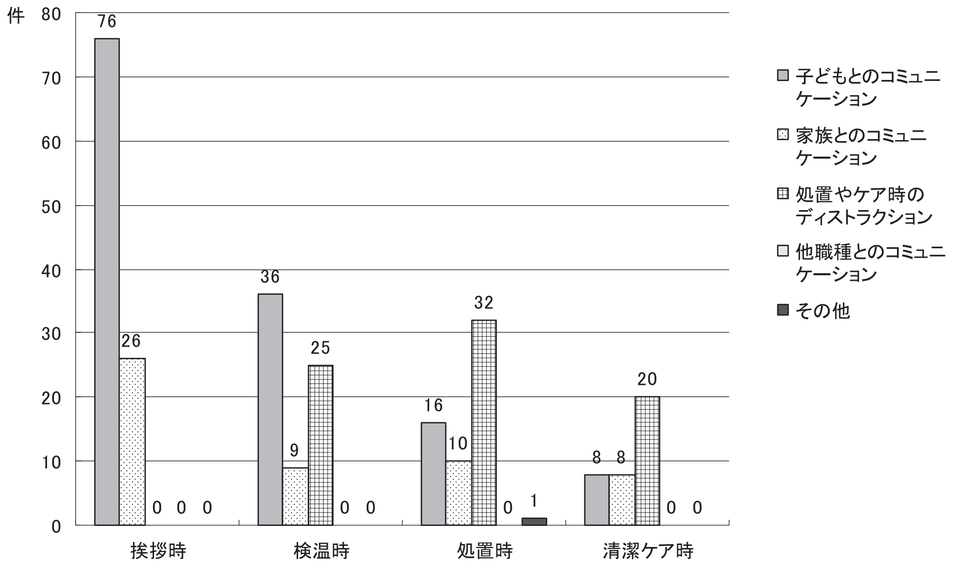

図 3　ツールとしての利用方法（複数回答）

り，3 歳児「ルートキープ中は泣き叫ぶ。後はユニフォームを指さし『ミッキーや。ミニーや。』と言って笑顔になる」とあった。

3.　自由記載

⑴ 子どもの状況

「オペ（手術）後だったのでずっと泣いており，反応がわかりませんでした」,「オペ（手術）当日，それどころではなかった」,「入院初日，発熱ありぐったりしている。反応が少なかった」,「寝起きのためか反応が少ない」など子どもの身体による反応の違いや,「呼吸器をつけていて反応が薄い」,「脳性麻痺のため反応がわかりにくい」といった子どもの反応の特徴があった。

また「ユニフォームを初めて見た子だったので反応がよかった。表情が和らぎバイタル測定がしやすかった」,「反応は朝のうちだけであった」,「ユニフォームに見慣れたためか反応なし」,「入院後 20 日たっているため，母子ともに反応は薄かった」などユニフォームを見た時期による子どもの反応の違いがあった。

⑵ 家族の反応

母親から得られた反応については，多くの記載があった。「白衣よりいい。明るくて小児のイメージ。子どもも大人も親しみやすい」,「白よりピンクの方がよい」,「話しかけやすい雰囲気」などがあった。

⑶ ツールとしての利用

「受け持ち以外でもユニフォームをきっかけにコミュニケーションが生じることがあった」,「名前よりもキャラクターの方が覚えてもらいやすく子どもとの距離が縮まった。子どもから声をかけられやすくなった」,「第一印象で子どもの心をつかめ，後の関わりがスムーズに行くのではないかと感じた」などユニフォームがコミュニケーションツールに有効に利用できたと実感していた。

さらに「採血にはプレパレーションを活用すべきだと実感」,「普段と同じように行くとあまり見ないが『何匹いてる？どれがいい？』など声をかけるとちらっと見てくれた」,「ユニフォームだけでは遊べないが，おもちゃなどを用いるとたくさん遊ぶことができる」など看護師が意図的にユニフォームをツールとして利用している方法があった。

Ⅴ．考　察

1.　場面ごとの効果

ユニフォームを変更したことで子どもの「反応なし」は，それ自体が子どもの反応であろう。子どもにとって看護師のユニフォームは環境の一部であり，自由記載にも一日の中でも「反応があるのは朝だけだった」とあるように，子どもが見慣れてくると環境の一部になるため，新たな驚きや関心は少なくなる。しかし,「白衣よりも泣かれるのが減った気がする」,「白衣より子どもたちの反応が柔らかくなる気がする」,「白衣の人は嫌いという児には効果あると思いました」とあるように白衣ではないユニフォームを着用することは，今まで白衣であったら緊張していた子どもが,「反応なし」でいられたとも考えられる。

本調査での成果としては，療養環境の中の看護師の

ユニフォームを変化させたことのみで，子どもからの様々な反応を得られたことである。挨拶時は，その日の受け持ち患児と初めて出会うときであり，看護師は子どものことを知るために関わる場面である。と同時に，子どもも看護師に関心を向け関わろうとしている。そこでの子ども反応は「笑顔になった」が多く，子どもの緊張や不安がやわらいだといえる。1 歳児で「指差しをした」，「注視した」，「追視した」の割合が多かったのもまた看護師へ関心を寄せており，興味深く観察しているといえる。さらに，「第一印象で子どもの心をつかめ，後の関わりがスムーズに行くのではないかと感じた」，4 歳児「『僕の担当ミッキーの先生だよ』と母親に話す」のように，子どもが持っているユニフォームの絵柄から得られる印象が強く影響し，看護師との距離を縮めるのに役立っていたのではないかと考える。

検温時は，子どもにとって一定時間の安静を強いられるが比較的侵襲の少ないケアであるため何かに注意をそらせることで，苦痛なく行うことができる。特に 2 歳児に「注視した」が多く，これは検温の説明を言葉で行われたとしても理解が難しい年齢であり，ユニフォームに興味を持っている間に検温が行われたと考えられる。しかし，処置時になるとユニフォームで注意をそらせる程度では効果的なディストラクションになりえず，処置に対するネガティブな反応が多く見られたといえる。

2.　ツールとしての利用

本調査では，看護師が意図的にユニフォームをツールとして利用した場合について具体的に記述してもらった。それは，ユニフォームを変化させることの有用性として，ツールの機能を知ることと看護師のコミュニケーションやディストラクションへの意識が高まることでツールとしてどのように活用するのかを知ることであった。

挨拶時，検温時ではコミュニケーションツールとして利用しており，検温時，処置時，清潔ケア時にはディストラクションツールとして利用していた。初めは看護師が意図的でなかったとしても，子どもや家族からユニフォームについて反応があったり，その反応を見て意図的にユニフォームに関心を向けるようにしていた。ツールとして有効に利用できると実感すると，ディストラクションツールとして利用し，「『見て見て』と注視させ，『数えて。何匹いる？』と声をかけると泣き止みじっと聴診させてくれた」や「ポケットに音のなるおもちゃを入れて，上からミッキー柄を押してもらう。『おもしろい』と笑う」のように活用の方法を考えて子どもに積極的に関わっていた。また「母が『チップいてるね。好きやもんね。』児は『どんぐりもある。どんぐりころころ〜』と笑顔で歌う」のように家族が利用していた。

ディストラクションとしての利用は，幼児期には五感を通じた感覚的な刺激を用いることが効果的であるため，子どもの親しみやすい色や柄のユニフォームは視覚的刺激に有効であったと言える。また幼児期後半には一緒に数を唱えたり，初めと終わりを言葉で知らせることで，子どもの対処能力を高めることができる[5]とも言われており，子どもとユニフォームの柄を数えたり，名前を言い合ったり，探したりすることは有効な方法であったと言える。

小児を対象とする看護師は日々様々なツールを駆使し，子どもに応じたコミュニケーションやディストラクションを行っている。ユニフォームの柄に関して話をしたり，おもちゃや歌を組み合わせたり，看護師のアイデア次第でユニフォームがツールとして活用できることがわかった。今回の調査で得られた，ツールとしての効果的な活用の方法をまとめ，着用の際に提案することができると考えられる。

3.　今後の課題

研究に協力いただいた看護師は，研究期間中できる限り，ユニフォームを着用し勤務に携わっていただいた。しかし，チェックリストの回収自体は予定人数よりも少ないものとなった。これは，チェックリストは看護師が子どもとの関わりがあるごとに記入できるように検討し，簡易なものを作成したが，やはり多忙な中タイムリーに記入することが難しかったことが考えられる。さらに，子どもの反応は「反応なし」が多かったため，看護師の印象に残る場面のみが選択される傾向にあった。また，乳児及び学童の調査数を増やし，発達段階別の検討も必要であると考える。

本調査は，看護師からみた子どもの反応にとどまっているが，子どもや家族からの感想や意見を調査し，ユニフォームが与える影響について検討をする必要があると考える。

Ⅵ．結　　論

1．看護師のユニフォームを子どもの親しみやすい色や柄に変更した結果，子どもの反応はどの場面にお

いても「反応なし」が最も多かった。

2．挨拶時のコミュニケーションには,「笑顔になった」,「指差しをした」といった反応が多くみられた。

3．看護師はユニフォームを挨拶時・検温時にはコミュニケーションツールとして，検温時・処置時・清潔ケア時にはディストラクションツールに利用しており，有効な利用方法を工夫していた。

謝辞

本研究の趣旨をご理解いただいた施設管理者の皆様，また調査にご協力いただいた看護師の皆様に深く感謝いたします。

引 用 文 献

1）中野綾美・編：小児看護技術，メディカ出版，大阪，2007.

2）筒井真優美・編：小児看護学第 6 版，日総研出版，名古屋，2010.

3）及川郁子・監修：子どもの外来看護，へるす出版，p 78–79，東京，2009.

4）蝦名美智子：わが国のプレパレーションの状況，小児看護，29(5)：548–554, 2006.

5）田中恭子：プレパレーションガイドブック，日総研出版，名古屋，2006.

6）Apple–pie URL : http : //www.aple–pie.biz/